

## 未来の創造…、歴史に学び、現実を見つめる…。

合掌

暮れに、映画「永遠の0(ゼロ)」を観ました。学生の頃より映画好きで、お金と時間があれば、映画を観に行っていました。今はそんな時間はありません。昔ながらの映画館も無くなり、最近の映画館は、全て指定席で、2本立てを何回も繰り返し観るなんてこともできないようです。椅子の座り心地や配置もよく、お尻が痛くなったり、前の座席の人の頭が邪魔になったりすることはありません。快適です。

さて、映画の話に戻ります。内容は…、ここであまり言ってしまうとこれから観ようと思っている人に悪いので詳しくは書きませんが、現代の若者姉弟が、自分の本当のお爺さんが、昔、特攻隊で戦死したことを知り、昔の戦友たちを訪ねてお爺さんの姿を求めるといった内容です。過去と現代が入り交りながら、謎解きのようにストーリーは展開していきます。「家族の為に絶対に死なない。」と、懸命に生きるゼロ戦パイロットが、最後に特攻に志願し、戦死します。姉弟のお爺さんです。なぜ、お爺さんは特攻に志願したのか。「特攻に往った者の気持ちは、特攻に往った者にしか分からない。」と、戦友たちの誰もが口を揃えて言います。

正月は実家の大分に帰っていました。実は、大分は最後の特攻隊が飛び立った地なのです。8月15日の終戦を告げる玉音放送から数時間後、航空特攻の指揮を執っていた宇垣纏中将が、11機の彗星(爆撃機)を率いて沖縄の空に向かいました。その特番を大分放送が放映していました。戦争が終わってからの戦闘行為は、正式な命令とは言えないということで、死亡した隊員たちは、戦死扱いにならず、2階級特進の名誉も与えられなかったそうです。宇垣中将は、特攻隊を見送るときに「わしも必ず後から往く。」と言っていたそうで、どうしても抑えられなかった気持ちも分かりますが、なぜ道連れに多くの若者たちを連れていったのかという批判が起きました。しかし、5機で良いと言った宇垣中将に対し、他の隊員たちが自分も往く。もしダメだと言うなら命令違反をしてでも往くと言っていたそうです。

冬休み中に、アンパンマンの作者であるやなせたかしさんの本を読みました。彼の弟も学徒動員で航空特攻に志願し、戦死されているそうです。太平洋戦争では、日本人だけでも、230万人もの軍人と80万人もの民間人が亡くなったのです。第2次世界大戦全体では、8000万人以上という数字も出ています。現代の日本の人口がおよそ1億2000万人ですから、その3分の2が、亡くなったことになります。もの凄いな数です。

開祖は生前、「戦争は絶対にいけない」と、自らの戦争体験をもとに訴え続けていました。悲しかな、人類の歴史は、戦争の繰り返しです。戦争に限らず、武力による争い、紛争や内乱、テロ等により、毎日のように、多くの命が奪われています。幸い日本は、先の大戦以来、不戦を誓い、憲法にも明記し、実際、戦争を経験していませんが、現在の近隣諸国との関係は決して良好なものではありません。

2014年。新しい年を迎えました。正月早々戦争という悲惨な話から入りましたが、私たちがこうして、日々新しい朝を迎えられることは決して当たり前のことではありません。今の日本が平和でいられるのも、彼の大戦での多くの尊い犠牲があったからなのです。そして、敗戦後の荒廃した日本を経済大国に成長させたのも、やはり、先人たちの多くの努力のお蔭です。

高校の社会科で、数年前世界史が必修になり、今、日本史の必修化が議論されています。日本がアメリカと戦争をしたことさえ知らない若者が増えているという新聞報道もありました。少林寺拳法の理想は、真に平和で豊かな社会を築いていくことです。未来を築くためには、過去や歴史に学び、現代に何が起きているのかをしっかりと見つめなくてはなりません。それも、国や組織もよって歪められたものではなく、真実のものを、です。

2度と過ちを繰り返さないために、私たちは、もっともっと、いろんなことを学び、自らの視野を広げていかなければなりません。

結手